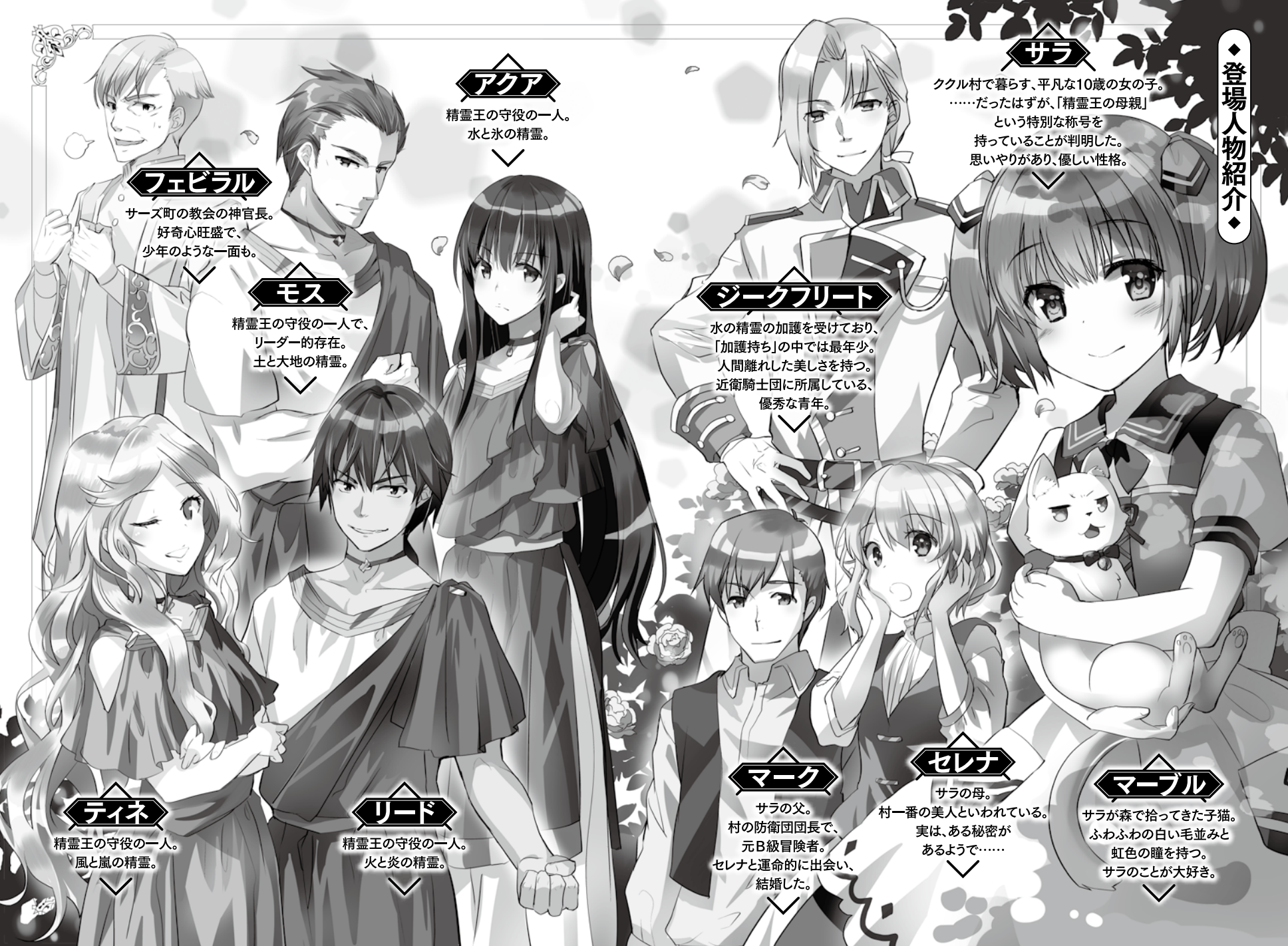
私がいつの間にか精霊王の母親に!?


◆登場人物紹介◆
サラ
ククル村で暮らす、平凡な10歳の女の子。
……だったはずが、「精霊王の母親」
という特別な称号を
持っていることが判明した。
思いやりがあり、優しい性格。
アクア
精霊王の守役の一人。
水と氷の精霊。
フェビラル
サーズ町の教会の神官長。
好奇心旺盛で、
少年のような一面も。
モス
精霊王の守役の一人で、
リーダー的存在。
土と大地の精霊。
ジークフリート
水の精霊の加護を受けており、
「加護持ち」の中では最年少。
人間離れした美しさを持つ。
近衛騎士団に所属している、
優秀な青年。
ティネ
精霊王の守役の一人。
風と嵐の精霊。
リード
精霊王の守役の一人。
火と炎の精霊。
マーク
サラの父。
村の防衛団団長で、
元B級冒険者。
セレナと運命的に出会い、
結婚した。
セレナ
サラの母。
村一番の美人といわれている。
実は、ある秘密が
あるようで……
マーブル
サラが森で拾ってきた子猫。
ふわふわの白い毛並みと
虹色の瞳を持つ。
サラのことが大好き。

序章

神は眠りにつく際に、世界を精霊王に託した。
これは神話にも出てこない、神と精霊達だけの秘密の約束。
そして精霊王は、今もどこかで世界の管理を行っている。

『大変ですわっ！　精霊王様がっ！』
『何事だ』
精霊王が暮らす時の狭間で、普段は冷静な精霊が慌てふためく事態が発生していた。
『精霊王様が出奔なさりましたっ！』
『なんだって!?』
『確かに、精霊王様の気配がどこにも感じられないわ。まだ時間があると油断していたのがまずかったわね』
『とにかく、すべての精霊達に精霊王様探索のお触れを出すのだ。今の時期、精霊王様はまだご自

分のお力をうまく使えないだろう。すぐに見つかると思うが……』
しかし精霊達の楽観的な予想は裏切られ、精霊王の行方はようとしてつかめなかった。

◇◇◇

「にー、にー……」
「……子猫？」
少女は森の中で、鳴き声を上げる子猫を見つけた。
「にゃんっ」
少女が手を差し伸べると、子猫は嬉しそうにすり寄ってくる。
「猫ちゃん一匹なの？　こんなにガリガリに痩せてかわいそうに……。うちの子になる？」
「なぁーん！」

――この一人の少女と一匹の子猫との出会いから、すべてが始まる。

第一章　能力鑑定

「あら、サラちゃん。ちょうどよかった！　サラちゃんもこれから教会かい？」
「サマンサさん、おはようございます！　サリーもおはよう！」
「サラお姉ちゃん、おはよう！」
ある朝、私が手提げカゴを持って教会へ続く道を歩いていると、雑貨屋のサマンサさんから声をかけられた。
今日は週に三回開かれる、教会でのお勉強会の日だ。
サマンサさんも娘のサリーを連れて教会に行くところだったのだろう。
「悪いけれど、今日もサリーを一緒に連れていってもらっていいかい？」
「いいですよ。サリー、一緒に行こう？」
「うん！」
サリーは私の六つ年下で、四歳。一人で教会に行くにはまだ早い年頃だ。
私とサリーが手をつなぐのを見届けて、サマンサさんは急いでお店に帰っていった。
そのまま二人でしばらく歩いていると、サリーが私の手提げカゴをチラチラ見ていることに気

づく。
きっと、いつものようにマーブルが手提げカゴの中にいるのか気になっているのだろう。
「マーブルと遊ぶのは教会に着いてからね」
私の言葉に、サリーは嬉しそうに頬を紅潮させたあと「うん！」と元気よく頷いた。
マーブルとは、私が飼っている子猫のことだ。
毛並みは真っ白でふわふわ。虹色の瞳はお日様の光で様々な色に変わって、いつまでも見ていたくなる。
ちょうど一年前の今頃、森の中をさまよっていたところを、果実採りに行っていた私が偶然見つけて家に連れ帰ったのだ。
お父さんは、子猫がたった一匹で森の中にいたと聞いて驚いていた。魔物がたくさんいる森を、親猫とはぐれた子猫が生き延びるのは奇跡に近いらしい。
確かに、拾った時のマーブルはガリガリに痩せ細り、とても弱っていた。
そんなマーブルを、私は元気になるまでつきっきりで看病した。そのためか、マーブルは私にとても懐いてくれて、それからというもの私達はどこへ行くにもいつも一緒だ。
今日もマーブルは、勉強道具の入った手提げカゴからご機嫌そうにこちらを見上げていた。
「あ！　ねーねだ！」
「サラ！」

「ちょうどよかった！」
「今日もよろしくね！」
サリーと二人で歩いていると、次から次へと声をかけられ、子供達を託される。
私が通るのを家の中から見ていたのではないかという程のタイミングのよさだ。
私自身もまだ十歳の子供だけど、このククル村の中では最年長だったりする。だから下の子達の世話を頼まれることが多かった。
教会に向かう子供達の中には、サリーのように勉強会に参加する年齢に達していない子もいる。けれど勉強会の間は神官様がご厚意で誰でも預かってくれるので、家事に仕事に忙しいお母さん達は我が子を教会へ向かわせるのだった。
教会は村から少し離れた場所にある。
目的地まであと半分といったところで、私はマーブルの入った手提げカゴを頭の上にのせ、疲れたとぐずる子達を両脇に抱えて歩く。
そうして先を行く元気な子供達に目を光らせながら、さらには後ろを歩く子供達にも声をかけつつ教会に向かった。
「おや、サラちゃん。おはよう」
「おはようございます！」
小さいとはいえ子供を抱えて歩くなんて、普通ならありえないくらいの怪力っぷりだと思うかも

しれない。
けれど、こんな私を見ても村の人達は何も言わない。
これが私自身の腕力によるものではなく、魔法を使っているためだと知っているから。
そう、こんな非力な子供でも、魔法を使えば複数の子供を軽々と抱きかかえることが可能なのだ。
この世界では、みんな何かしらの魔法を使うことができる。とはいえ、すべての人が私みたいに気軽に使えるわけではないらしい。
不思議な話だけど、私は教えてもらう前から魔法を使うことができた。
ちなみに子供を抱える時に使っている魔法は、強化魔法というのだと以前お父さんに教えてもらった。
普通は、練習せずに魔法は使えない。ましてや自分が知らない魔法を発動することなんてありえないという。
ところが私は、気づいた時には魔法が使えていた。
最近では無詠唱で魔法が使えるようになっている。それはとても珍しいことなのだと、お母さんは言っていた。
なんでかっていうと、魔法を使うには精霊様の協力が必要になるからなんだって。
この世界にはたくさんの精霊様がいて、どんな精霊様が力を貸してくれるかによって使える魔法や、その効果の大きさが異なるらしい。

たとえば火の精霊様に好かれている人は火属性の魔法が、水の精霊様に好かれている人は水属性の魔法が得意だ。力のある精霊様にお手伝いしてもらえれば、人が使う魔法も強くなるとか。
無詠唱だと精霊様を呼ぶのは難しいから、普通はなかなかできないんだそうだ。
ただ、普通の人間には精霊様のお姿を見ることはできないので、詳しいことはあまりわかっていないみたい。
私は特に苦手な属性の魔法もないし、これという程得意なものもないけれど、この村にいる誰よりも魔法の扱いがうまいとみんなから言われていた。
まあ、高度な魔法を使うことはお母さんに禁止されているので、本当のところはどうなのかわからないけどね。
それに今は、とある理由から、みんなの私に対する期待が重すぎて困っていたりする。
「はあ……」
「ねーね、ため息ついてどうしたの？」
「だいじょーぶ？」
無意識にため息をついていたようで、抱えている子達が心配そうにこちらを見ていた。
「大丈夫だよ！　心配かけてごめんね」
お詫びに高い高いをしてあげると、子供達はきゃっきゃっと楽しそうに声を上げて笑う。
悩んでても仕方がないし、気持ちを切り替えなくっちゃね。

教会に着くと、いつものように神官様が教会の入り口でお出迎えしてくれた。
「「神官様、おはようございます」」」
「「「ごじゃいます」」」」
「みなさん、おはよう」
神官様に挨拶をしたあと、村の集会所としても使われている教会の一室で勉強を教えてもらう。
教会で勉強するのは五歳以上の子供達なので、四歳以下の子達は部屋の後ろのほうで遊び始めた。
「マーブル、今日もお願いね」
私はマーブルを手提げカゴから抱き上げてお願いする。
「にゃん♪」
マーブルには子供達が危険な行為をしないか、いつも見守ってもらっていた。
子供達に何かあるとすぐに鳴き声を上げてくれる、とても頼もしい相棒なのだ。
「マーブルだ！」
ずっとマーブルと遊びたがっていたサリーが、私に向かって手を伸ばす。どうやらマーブルを抱っこしたいようだ。
「優しくしてあげてね。マーブルも、みんなをよろしく」
「うん！」

「にゃん！」
サリーがマーブルを抱きかかえるのを、他の子供達がうらやましそうに見ている。そんな子達のために、私はおもちゃ箱に入っている動物のぬいぐるみやお人形をいつものように風魔法で動かした。
子供達はお人形や動物と一緒になってクルクル回ったり、飛び跳ねたりして楽しそうだ。これでしばらくは大丈夫だろう。
「サラ！　早く席座れよっ。授業が始まらねーだろ」
ぬいぐるみ達の動きにもっと捻りを加えるべきかと考え込んでいたら、すでに着席していたライリーに怒られてしまった。七歳のライリーは、村の子供達の中では私の次に年長になる。
ライリーの言う通り、勉強組は既に全員が席に着き、神官様も部屋に来ていて私を待っている状態だった。
「サラは相変わらずどんくさいな」
「うっ。ご、ごめんね」
毎度のことながら、一つのことに夢中になると周りが見えなくなるのは私の悪い癖だ。
しょんぼりしていると、ライリーと同い年のネネがフォローしてくれる。
「ライリーったら！　サラちゃんが小さい子達のお世話をしてくれるから、ネネ達はお勉強に集中できるのよ。もっと感謝しないと！」

魔法のおかげか、四歳以下の子には絶大な人気がある私だけれど、これが五歳以上の子達になると少し話が変わってくる。

男の子達は生意気になり、女の子達はたまに年下の子を見るような目を私に向けるのだ。少し前のライリー達が、キラキラした瞳で私を見ていたのを懐かしく思いつつ、席に着く。

「今日はみんなにお話があります」

神官様が私達を見回し、ゆっくりと口を開いた。

私達は、普段は神官様から年齢別に出される問題を解くことが多い。

しかし、みんな一緒に神官様のお話を聞くこともある。そういう時は、四歳以下の子供達も自然と集まってきて耳を傾けるのだ。

「いよいよ、サラがサーズ町へ能力鑑定に行く日が近づいてきました。今回はせっかくですので、能力鑑定について話をしようと思います」

私が暮らしているラーミル王国では、十歳の時と成人する十五歳の時の二回、能力鑑定を受ける義務がある。

私は今年で十歳。初めての能力鑑定を数日後に控えていた。

そしてこの能力鑑定こそが、私の抱える悩みだったりするわけで……

「教会にある魔道具を使って行う能力鑑定では、各属性との相性や、習得している魔法、持っているスキル、そして称号の有無など、自らの能力のすべてを知ることができます。魔法を使うことで精霊様と触れ合うと、その人に精霊様と同じ属性が備わるのはみなさんもご存じですね？　能力鑑定では、その程度が相性度として明らかになります」

私が悶々としている間も、神官様の説明はどんどん進んでいく。

みんなにとってはまだ先の話だけれど、私が能力鑑定を受けることもあってか、彼らは真剣に話を聞いていた。

「各属性との相性を知ることは、自分の将来を考える指針にもなります。たとえば三年前に成人したカイは火属性と土属性との相性度が高かったため、十歳の頃に鍛冶職人になることを決めました。今は鍛冶職人のゲランさんの下で見習いとして頑張っています。もちろん、相性度が低かったからといって、諦める必要はありません。その属性の魔法を使うことで相性度が高くなったという話はよく聞きますからね。ただ、もともと相性のよかった属性より伸びが悪いのも事実です。やはり、より力を貸そうとしてくださる精霊様とのほうが、仲を深めやすいので、その属性の魔法をうまく扱えるようになるのでしょう」

「ネネにはなんの属性があるかな？　相性度はどのくらいだろう？　低かったらどうしよう？」

「へんっ！　お、俺はもう火と風の魔法が使えるもんね！　それなら二つの属性は絶対に持っているだろうし、相性度もそう低くないはず！」

神官様の言葉にみんながざわざわする。すると神官様が「この村の子達はみんな優秀ですから大丈夫ですよ」と、みんなを安心させるように言ってくれた。

でも、そのあとに続く言葉は余計だったと思う。
「中でもサラは特別です。きっと能力鑑定では驚きの判定が出るでしょう。私はそう確信しています」
神官様の言葉で、みんなが一斉にこちらを見たのがわかった。
そう、私の今の悩みはこれだ！
みんなの私に対する、この過度な期待はいったいなんなのか。
能力鑑定でみんなの思うような結果が出なかったらと考えると、すごく不安なのだけれど……
そんな私の様子に気づくことなく、みんなは楽しそうに会話している。
「サラは精霊様の加護持ちに違いないって、ボクの父さんが言ってた！」
「あたしも聞いた！　でも、加護持ちってなぁに？」
「それは先程お話しした、称号に関わります。称号とは、精霊様が私達に授けてくださるもの。残念ながら、称号をいただける人はそう多くありませんが、授かった場合には、その内容によって受けられる恩恵が変わります。そして称号は、好意持ちと加護持ちの二つに分けられます。好意持ちは、称号を授けてくださった精霊様の属性との相性度がずば抜けて高く、称号を持たない者よりも魔法の効果が上がります。一方で加護持ちの称号を持っているのは、現在この国では四人しかいません。特別な称号で、授かる恩恵も好意持ちよりはるかに大きいという話です。どういった恩恵なのかは私にはわからないのですが、噂では加護を授けてくださった精霊様のお姿を見ることができるようになるとか」
「サラちゃんは精霊様のお姿を見たことあるの!?」
神官様の説明に、みんながこちらを期待のまなざしで見てくる。けれど、もちろんそんな経験はまったくない。
静かに首を振る私を見て、みんなの顔ががっかりしたものに変わる。
「私が話したことはあくまで噂ですからね。サラの能力を考えれば、十分に加護持ちである可能性は残されていますよ」
「サラちゃんすごい！」
「あ、あはははは。あ、ありがとう？」
みんなに悪気がないことはわかっているので、私は引きつる顔に無理やり笑みを浮かべるのだった。
「お母さん、ただいま」
「にゃん」
「おかえりなさい」
マーブルと一緒に家に帰ると、お母さんが私のお出かけ用の服を繕っていた。
プラチナブロンドの髪と紫の瞳を持つお母さんは、村一番の美人と評判だ。ムートさんという旅

商人がお母さんを一目見てすぐに結婚の申し込みをしたと言えば、お母さんの美人っぷりがよくわかるだろうか？

お父さんの一睨みでムートさんはすぐに申し込みを撤回したそうだけど、優しくって、とってもきれいなお母さんは私の自慢だ。

「お父さんは？」

「今日は門番のお仕事だって言ってらしたから、もう少ししたら帰ってくるんじゃないかしら？」

赤い髪に藍色の瞳を持つお父さんもなかなかの男前で、この村を守るために結成された防衛団の団長を務めている。村の周辺を巡回して魔物を倒したり、盗賊をやっつけたりと、強くてかっこいいお父さんももちろん私の自慢だ。

お母さんはお父さんに命を助けてもらったのがきっかけで知り合い、結婚したんだって。その時のお父さんはとても素敵だったのだと頬を染めて教えてくれた。

まるで物語のような出会いなので、もっと詳しい話を聞きたくなるのだけど、「サラが大人になったらね」といつもなぜかはぐらかされてしまう。

ちなみにそんな美男美女の両親から生まれた私の外見は、悲しいことに平々凡々。茶色の髪に瞳は翡翠色で、二人に似たところが一つもない。でも、お祖父様に似ているのだそうだ。

小さい頃、両親に似ていないと言われる度に落ち込んでいた私に、お母さんはお祖父様の絵姿が入ったロケットペンダントを見せてくれた。

「大好きなお父様に似ていて嬉しい」とお母さんが言ってくれたから、それからは何を言われても平気になった。

「そういえば、今日は能力鑑定について神官様がお話ししてくれたよ。能力鑑定は魔道具を使って行うんだね」

「その通りよ。魔道具について他にも習ったことはあるかしら？」

マーブルを手提げカゴから出してやり、濡らしたタオルで足を拭いてあげながら、お母さんに今日教えてもらったことを披露する。

「えっと、魔道具は魔法が付与された道具のことで、とっても希少なものだからすべての町や村に置いておくことができないんだって。だから能力鑑定のためには、大きな町にある教会に行く必要があるんだよね？」

「正解よ。よく勉強したわね」

「えへへー」

「セレナ、サラ、今帰ったぞー！」

「あ！　お父さんの声だ！」

お母さんに頭を撫でられ喜んでいると、お父さんがたくさんの野菜を両脇に抱えて帰ってきた。

「まあ！　マーク、そのお野菜はどうしたの？」

「帰る途中で村のみんなにもらったんだ。数日後にサラが能力鑑定を控えているだろう？　みんな

サラに何かしてやりたくて仕方がないみたいだな」
「サラ、明日にでもお礼を言いに行きましょうね。それにしても、食べきれるかしら？」
「……」
「にゃ？」
二人の話をよそに、私はマーブルの体を抱き上げてぎゅっと抱き締める。
マーブルが不思議そうに首をかしげるけれど、大人しく抱き締められたままでいてくれた。
「サラ、どうした？」
「……私、精霊様のご加護があると思う？」
「あんなに上手に魔法が使えるのだもの、大丈夫よ」
「うん……」
ここ数日、能力鑑定を受けるのが不安になっていた。
もし、みんなの期待に応えられなかったら……
うつむいていると、お母さんが私をマーブルごとぎゅっと抱き締めてくれた。
「精霊様のご加護がなかったとしても、大丈夫。あなたは私達のかわいい娘よ。村の人達が何か言ってきたら、お父さんにお仕置きしてもらいましょう」
「かわいい娘のためなら、お父さん頑張っちゃうぞ！」
お父さんはそう言って、私に向かって力こぶを作って見せてくれる。

お父さんが頑張ったら、村の人達は無事ではすまなそうだ。
でも、私のためだと思うと嬉しいな。
「二人とも、ありがとう。もし、加護がなかったとしても気にしないね！　だから、村の人達にはお仕置きしないで！」
二人にお礼を言うと、マーブルが私の手を必死でペロペロとなめてきた。
まるで僕もいるよと言っているみたい。
「マーブルもありがとう」
「にゃん！」
そうだよね。なるようにしかならないんだから、あまりくよくよ考えるのはやめよう！
――この時の私は、まさか加護の称号が霞むようなとんでもない称号が自分についているとは露知らず、のんきに笑っていたのだった。

◇◇◇

そして数日後、ついに能力鑑定を受けにサーズ町に行く日がやってきた。
明け方の出発だったにもかかわらず、村のみんなはわざわざ集まって見送ってくれた。
それから馬車に揺られること二時間。私達一家はサーズ町の門の前で検問の順番を待っていた。

サーズ町は全体を巨大な壁で囲まれていて、門の前には長蛇の列。ククル村とは規模が違いすぎて、その大きさに圧倒されてしまう。
私が呆気にとられている間にも、少しずつ列は進んでいった。
お父さんが言うには、このまま順調にいけば一時間程で町に入れるらしい。
「マーブルは教会の中に連れていけるかなぁ」
私の手に頭を擦りつけてくるマーブルを撫でながら、お母さんに尋ねる。
「そうねぇ。神官様におうかがいして、もし無理ならお母さんがマーブルと一緒に外で待ってるわ」
本当はマーブルを連れてくるつもりはなかった。
マーブルを一匹で残していくのはかわいそうだけど、お母さんに人ごみでパニックになって逃げ出すかもしれないと言われて、連れていくのを諦めることにしていた。
なのでサマンサさんにお願いして、マーブルを今日一日預かってもらう予定でいた。ところが、マーブルが私と離れたくないと必死になってしがみついてきたのだ。結局、降参したのは私達のほうだった。
あんなうるうるの瞳で見られたら、仕方がないよね。
今はご機嫌にのどを鳴らすマーブルを見て、やっぱり連れてきてよかったと思うのだった。
そうしてやっと私達の番がやってきた。

お父さんが門番さんに身分証を渡すと、彼は驚いたようにそれとお父さんの顔を交互に見つめる。
「冒険者カードですね。B級とはすばらしい！　しばらくこの町にご滞在されるのですか？」
「いや、とっくの昔に冒険者稼業は引退していてね。今はククル村の防衛団で働いている。たまに魔物を引き渡しにギルドに行くから、カードはそのまま使えるようにしているんだ」
「それは失礼しました。では、本日はどのようなご用件で？」
「今日は娘の能力鑑定を受けに来た」
お父さんがこちらを見たので、お母さんと一緒に門番さんにペコリとお辞儀する。
お父さんのカードのおかげか、すんなりと町の中に入ることができた。
「お父さんって、すごいんだねっ」
「あー。まぁ、ここらあたりは辺境だからな。魔物を倒せる冒険者は優遇してくれるんだ。王都に近いところは、もっと審査が厳しいぞ」
すごい、すごいとはしゃいでいると、お父さんが照れ臭そうに鼻の頭をかきながら、種明かしをしてくれた。
門番さんの様子を見れば、それだけが理由じゃないのは私でもわかるのにお父さんったら。でも、変に偉ぶらないのがお父さんらしい。
門の近くにある預かり所で、馬のメアリーと馬車を預かってもらうと、あとはもう教会に向かうだけだ。

お父さん達はこの町の教会に行ったことがあるのか、迷うそぶりもなく歩き出す。
私はマーブルをケープのポケットの中に入れて、はぐれないように二人と手をつないだ。
しばらく歩いていると、子供連れの家族が周りに増えてくる。
私と同じ年くらいの子ばっかりだ。みんな教会に行くのかな？
そんなふうに周りをキョロキョロ見回していたら、二人の足が止まった。
「サラ、ご覧。教会が見えてきたぞ」
慌てて正面を向いた私の目に飛び込んできたのは、白くて大きな建物。
ククル村の教会とは比べものにならない大きさに唖然とする。
教会の入り口に近づくと、すぐに全身に真っ白な衣装をまとった神官様がこちらに気づいてくれた。
服装はククル村の神官様と同じで、少しほっとする。いつ見ても汚れが目立ちそうな衣装だ。
「能力鑑定をご希望ですか？」
神官様に、お父さんが頷く。
「はい。ククル村からやってきました。娘の名はサラです」
「では、こちらへ」
すぐに中へ案内しようとしてくれた神官様に、お母さんが声をかけた。
「神官様、教会の中に猫を連れていっても大丈夫でしょうか？」

「猫ですか？」
私は慌ててポケットからマーブルを出して、神官様によく見えるように目の前に差し出す。
「この子なんです。名前はマーブル。まだ小さいから家に置いてくるのがかわいそうで……一緒に連れていってもいいですか？」
神官様は私の手の中にいるマーブルを見るため、わざわざ屈んでくれた。
「おや、本当にまだ小さい子だ。大丈夫だよ。控え室でご両親と一緒に待っていてもらおうね」
「ありがとうございます！」
「にゃーん」
よかった！　どうやら問題なく、マーブルも一緒に入ることができるみたい！
神官様の案内で、私達は教会の中を進んでいく。一定の間隔を空けてお花が飾られた廊下には赤い絨毯が敷かれている。白い廊下に映えてとってもきれい。
「こちらが控え室になります」
神官様が立ち止まり、部屋の扉を開けてくれる。その中では、何組かの親子がすでに座って待っていた。
「子供達は順番にお呼びいたします。能力鑑定が終わりましたら戻ってきますので、ご両親はそれまでの間、こちらでお待ちください」
「わかりました。ご案内ありがとうございます」

神官様は必要な説明がすむと、最後にマーブルをひと撫でしてから部屋を出ていった。
どうやら、神官様もマーブルの魅力には抗えなかったようだ。
控え室に置かれた長椅子にはあまり空きがなく、どこに座ろうか悩んでいたら、近くに座っていた親子が声をかけてくれた。ありがたくお言葉に甘えて、隣に座らせてもらうことにする。
声をかけてくれた男性は、ハッサンさんというらしい。この町で宿屋を営んでいるのだと自己紹介してくれた。
奥さんの名前はエミナさんで、黒髪に茶色の瞳の女の子がアミーちゃん。
キリッとした眉と吊り上がり気味の目が印象的な彼女は、初対面でもまったく物怖じしないで話しかけてくれて、同い年なのにとても頼りになるお姉さんみたいな子だ。
アミーちゃんにマーブルを見せてあげたら、瞳をキラキラさせてとってもかわいいって言ってくれた。
「――じゃあサラちゃんは、この町に来たのは今回が初めてなんだ」
「うん。ずっと村から出たことがなくって。だから、昨日はなかなか眠れなかったの」
すっかりアミーちゃんと仲よくなった私は、お母さん達にも言っていなかった話まで打ち明けていた。
馬車の中で何度も欠伸をしていたから、お母さん達にはバレバレだったかもしれないけど。
「あたしも父ちゃんの仕事が仕事だから、この町から出たことがないのよね。能力鑑定を受けるの

もこの町の教会でしょう？　鑑定の魔道具が違う場所にあったら、宿の仕事も休むことができたのに、がっかりよ」
アミーちゃん達が教会にいる間は、叔母さんが店番をしてくれているんだって。
だから、能力鑑定が終わったらすぐに家に戻らないといけないと残念そうに話してくれた。
アミーちゃんはお宿の仕事を継ぐ気はないそうで、王立魔法学校への入学を狙っているらしい。
「王都にある王立魔法学校は優秀な子供達しか入学できない、まさに特別な学校なの。卒業生の中には有名な冒険者や、平民から貴族になった人もいるのよ。鑑定結果によってはこの王立魔法学校に試験なしで入学できるらしいから、あたしはこのチャンスにかけているの」
「またお前はそんな夢物語のようなことを言っているのか！」
アミーちゃんの話が聞こえたのか、ハッサンさんが咎めるような口調で口を挟んできた。
「あたしは本気だから。もし能力鑑定で入学が認められたら入ってもいいって言ったの、忘れないでよね」
「期待しすぎてあとで泣くことになっても、父ちゃんは知らんからな」
アミーちゃんはこの件で何度もハッサンさんと衝突していて、つい最近になってやっと入学許可をもぎ取ることに成功したらしい。
そのかわり、入学許可証をもらえなかったら宿を継ぐことになるそうで、アミーちゃんのこの能力鑑定にかける思いは相当強いようだ。

王立魔法学校かぁ。
アミーちゃんの話を聞いて、私は将来のことなんてまったく考えていなかったことに気づく。
神官様がカイお兄ちゃんの話をしたのも、そんな私を見透かしていたからかもしれない。
神官様ごめんなさい。目先の能力鑑定のことで頭がいっぱいで何も考えていませんでした。
心の中でククル村の神官様に謝っていると、いつの間にか神官様がやってきて、私とアミーちゃんの名前が呼ばれる。
いよいよ私達の番だ！
「行こう、サラちゃん」
「うん！」
アミーちゃんの差し出した手をつかんで、立ち上がる。
すると、今まで私の膝で大人しくしていたマーブルが、私の服に爪をたてて離されまいと必死でしがみついてきた。
「フミーッ！」
「マーブル、いい子だからお母さんと一緒にここで待ってて。ね？」
すぐに戻ってくるからとマーブルをなだめてなんとかお母さんに託すと、アミーちゃんと神官様のもとへ向かう。
私達以外にもう一人、桃色の髪の女の子も一緒だ。

私達三人は神官様に連れられ、教会の奥に向かって進んでいった。
廊下はしんと静まりかえっていて、私達の足音だけが響く。
「さぁ。着きましたよ」
神官様が扉を開くと、中にいたたくさんの神官様達が私達を迎えてくれた。
部屋の正面奥には台があり、その上には透明な水晶玉が置いてある。
不思議なことに、水晶玉は淡く光り輝いていて、幻想的な雰囲気を醸し出していた。
あれが神官様の言っていた魔道具なのかな？
その向こうには、白髪で紫の瞳の神官様が立っている。
「では、アルム村のキャシー、台の前に立ちなさい」
「はい」
白髪の神官様がよく響く声で名前を呼ぶと、桃色の髪の女の子が返事をして台の前まで歩いていった。
あの子の名前はキャシーちゃんっていうんだ。
「水晶玉に手を置いて」
神官様の指示通りキャシーちゃんが水晶玉に手を置く。すると突然、彼女の目の前に透明な板が現れた！
「「きゃっ！」」

「大丈夫ですよ。あの板に能力鑑定の結果が表示されるのです」
突然のことに驚いて叫んでしまった私達に、ここまで案内してくれた神官様が教えてくれた。
キャシーちゃんの前に立った白髪の神官様は、板を見ながらなにやら紙に書いている。
「君は光の精霊様から好意を持たれているね。光の精霊様が好意を持つことはめったにないことだよ。魔力も十分あるし、他の精霊様達との相性もいいようだ。将来、他の精霊様からも好意を持たれる可能性が高い。とてもすばらしい鑑定結果だ」
白髪の神官様が書き終わった紙を見ながら笑顔で説明した。
「ありがとうございます！」
「こちらが鑑定書だ。ご両親に見せなさい」
神官様から紙を渡されて、キャシーちゃんがこちらに戻ってくる。
キャシーちゃんはほっぺたを赤く染めて、嬉しそうだ。桃色の瞳がキラキラと輝いていて、とてもかわいい。
次にアミーちゃんが呼ばれ、水晶玉に手を置くと、さっきと同じように板が現れる。
「君は火と水の精霊様に好意を持たれているね。相反する属性の精霊様両方に好意を持たれるとは珍しい。魔力量は普通だが、十歳ですでに二つの属性の精霊様から好意を持たれていることは、すばらしいことだよ」
「ありがとうございます」

アミーちゃんがほっとした顔でこちらに戻ってきた。私と目が合うと、笑顔を見せてくれる。
次はいよいよ私の番だ。緊張するよーっ！
「ククル村のサラ、台の前へ」
「はっ、はい～っ」
緊張のせいか、変な声が出ちゃった。ガチガチに固まった足をなんとか前に出す。
アミーちゃん達がとてもいい鑑定結果だったから、自分だけ悪い結果が出たらとまた不安になる。
ダメ、ダメ！　結果なんて気にしないって数日前に決めたでしょ！
不安な気持ちを打ち消して水晶玉に手を置くと、前の二人の時と同じように板が一瞬で目の前に現れた。
近くで見た板は水晶玉のようにキラキラしていて、こちらからでは何が書いてあるかわからない。
白髪の神官様のほうからは読めるみたいで、板に目を通しつつ、紙にすらすらと文字を書いていった。
私はドキドキしながら神官様のお言葉を待つ。
すると、板に書かれていたことをすべて書き留めたらしい神官様から、驚きの声が上がった。
「こっこれは！」
予想外の反応に戸惑いながら、神官様の次の言葉を待つ。そんな私にかけられた言葉は思いがけないものだった。

「……なんであろう？」
「……へ？」
困惑している様子の神官様には申し訳ないけれど、私に聞かれても困る。こっちからはなんて書いてあるのかわからないんだもん。
こんなことはめったにないのだろう。周りにいる神官様達も戸惑っているみたい。
「あ、あの？　私の鑑定結果が何か？」
いつまでも結果を伝えてくれないことが我慢できなくて、白髪の神官様に話しかけてしまう。
でも白髪の神官様には私の声が聞こえなかったみたいだ。神官様はなにやらぶつぶつと独り言を呟くだけで、私の問いかけには答えてくれなかった。
「相性度は……おそらく高いのだ。しかし、これは……」
白髪の神官様は突然がばっと顔を上げ、真剣なまなざしで私を見つめる。
「……ところで、君にひとつ質問をしたいのだが、いいかな？」
「はい！」
質問ってなんだろう？　鑑定結果と関わりのあることかな？
結果を教えてくれるなら、なんでもお話しします！　そんな気持ちで神官様の質問を待つ。
「君は……、いや。あなた様は人間なのでしょうか？」
「はへっ!?」

「フェビラル様っ!?」
白髪の神官様のとんでもない質問に、周りにいた神官様達もさすがに騒ぎ出す。
私もわけがわからず大混乱だ。私って人間じゃないの？
いやいや、お父さんもお母さんも人間だし、私はお祖父様似だってお母さんも言ってたもん。
わたし、にんげん、だいじょうぶ。
「フェビラル様、いったいどうしたと言うのですかっ」
「そうですよ。お早く鑑定結果を――」
「鑑定では人間なのだ。しかし、称号が……」
他の神官様に急かされて、白髪の神官様がようやく私の鑑定結果について話し出す。私はその呟くような言葉を聞き逃さなかった。
「私にも称号があるんですか!?」
神官様がこんな変な反応をするなんて、いったい私にどんなおかしな称号がついているというのか。じらさずに早く教えて～！

「称号は……精霊王の母親、と」

せいれいおう？　精霊おう……、精霊王!?

「「「「「……はぁーっ!?」」」」」
みんなの心がひとつになった瞬間だった。
私が精霊王様の母親!?　普通の精霊様にもお会いしたことがないのに、なれるものなのっ!?
神官様達が私の鑑定書を囲んで絶句する様子を、私はぼんやりと眺めることしかできなかった。

その後、アミーちゃん達とは別れ、私だけ別室に連れていかれた。
アミーちゃんとキャシーちゃんは鑑定結果が認められたらしく、帰りがけに王立魔法学校の入学許可証を受け取っていた。しかし、さっきとは違って二人の顔に笑顔はなかった。
キャシーちゃんは先程とは打って変わって、なぜかふてくされたように唇を尖らせていたし、アミーちゃんは神官様に退出を促されても、すぐには部屋を出ずにこちらを心配そうに見つめていた。
アミーちゃんを安心させるためになんとか笑顔をつくったけれど、ひきつっていたかもしれない。
私だけが通された部屋は、能力鑑定をした部屋や控え室より狭く、窓がひとつもない。なんだか息苦しい部屋だ。
そこでお父さん達が来るのを待っているんだけど、神官様達は誰も一言も話さずに私をキラキラした目で見つめてくる。正直、とても居心地が悪い。
それにしても、好意持ちと加護持ち以外にも称号が存在するなんて驚きだ。
神官様達も初めて聞く称号のようだし、そんなものを私が授かっているなんて思いもよらな

かった。
それに精霊王様かぁ。王様って言うくらいだから、精霊様の中で一番偉いんだよね？
そんな精霊王様から、なぜ私が称号を……しかも母親なんていうよくわからない称号を授かったのか、いくら考えても答えは見つからなかった。
ひょっとして私が人より魔法を使えるのは、この称号のおかげなのかな？
「「サラっ!!」」
尽きることのない疑問に一人で頭を抱えていると、青い顔をした二人が神官様に連れられてやってきた。
「お父さん！　お母さん！」
椅子から立ち上がりお母さんに抱きつくと、お父さんがお母さんごと抱き締めてくれた。
「いったい何があったんだ？」
「顔色が悪いわ。大丈夫？」
お父さん達も詳しい説明はされずに連れてこられたみたい。
二人にいっぱい心配されて、しっかり抱き締めてもらい、ようやく安心することができた。
私達が落ち着くのを待って、白髪の神官様が話しかけてくる。
「サラ様はご無事です。ですが、私共も初めて聞く称号を精霊様より与えられておりまして……」
「「サラ様？」」

神官様が私を様付けで呼んだことに、二人が首をかしげる。
そうだよね！　おかしいよね！
この部屋に来るまでに何度もやめてほしいと伝えたのに、「精霊王様の母上様を呼び捨てすることはできない」と、絶対に呼び方を変えてくれなかったのだ。
「事情をご説明しますから、まずはおかけください」
お父さんとお母さんに、能力鑑定をしてくれた白髪の神官様が椅子をすすめる。
確か名前はフェなんとか様！　名前が難しくって覚えられなかったので、私の心の中ではフェ様と呼んでおこう。
……決して、様付け呼びの仕返しではないと言っておく。
「こちらをご覧ください」
私達三人が座ると、フェ様が紙を目の前に置いた。
先程の鑑定結果の紙だ。私もまだ内容を見ていなかったので、両親と一緒になってのぞき込む。
いったい、どんなことが書いてあるんだろう。あの変な称号以外は普通でありますように！

名前　サラ
種族　人間
年齢　十歳

レベル　一
体力　三〇＋一〇
魔力　二〇〇＋一〇〇〇
各属性との相性度
火　ＳＳＳ
水　ＳＳＳ
風　ＳＳＳ
土　ＳＳＳ
炎　ＳＳＳ
氷　ＳＳＳ
嵐　ＳＳＳ
大地　ＳＳＳ
光　ＳＳＳ
闇　ＳＳＳ
聖光（せいこう）　ＳＳＳ
闇黒（あんこく）　ＳＳＳ
空間　ＳＳＳ
時空　ＳＳＳ
――以下略――
習得魔法　全属性
スキル　家事手伝い、無詠唱、魔法無効、効果増幅、超回復
称号　精霊王の母親

「「……」」

読んでみたはいいけど、他の人の鑑定書を見たことがないので、私にはこの結果がいいものなのか、悪いものなのかわからない。

ＳＳＳって、いいの？　悪いの？

それに鑑定書に以下略なんて言葉、出てくるものなのかな？

すべての能力を教えてくれるんじゃないの？

体力と魔力量の欄に書いてある、プラスの数字もよくわからない。

気になるところを上げればきりがないので、私は自分で考えることを諦（あきら）め、お父さん達を見上げて……後悔した。

お父さんは口を大きく開けたまま、時が止まってしまったかのように動かないし、お母さんは口を手で覆（おお）って目を見開いている。こちらも動かない。

フェ様達を見ると、全員がなぜか頷いている。「その気持ち、よくわかるよ」とでも言いたげだ。
……誰か私に説明してください。
そう思いながら、とりあえずフェ様とは別の神官様がいれてくれたお茶を飲み、一息つく。
お父さん達もお茶を飲んで、少し落ち着いたみたい。
フェ様も二人の様子を見て大丈夫だと思ったのか、再び口を開く。
「鑑定結果には私共も非常に驚いております。なぜなら、私共も初めて見る内容が多くあるからです」
「あのっ。俺、いや、私は無学なもので、もしかしたらおかしなことを聞くかもしれませんが、よろしいですか」
「こちらもすべてにお答えできるかわかりませんが、どうぞ」
お父さんの言葉に、フェ様が優しく答える。
「たくさんの属性との相性度が書かれていますが、十歳の娘にこんなにたくさんの属性との相性度が現れるものなんですかね？」
「ふむ」
「私が十歳の頃は火、水、風、大地の相性度が表示されたくらいで、高いものでもランクはBでした。それに私が知っている最高ランクはSです。しかし、ここにはSが三つ並んでいる。これはどういった意味なんでしょうか？」

私もこれがどういう意味なのか知りたい。
そんな思いが伝わったのか、フェ様はわかったと言うように頷いてくれる。
「サラ様にもわかるようにご説明しますと、火、水、風、土は基本の属性で、その上位属性が炎、氷、嵐、大地になります。普通、私達は基本属性の魔法を覚える過程で精霊様と触れ合い、基本属性との相性度を上げていくのです。それからより高度な魔法を使うことで、上位属性との相性度を高めていきます。相性度にはランクがあり、最低ランクのFから始まって、E、D、C、B、A、Sと上がっていきます」
「最高ランクは、やはりSなんですか？」
お父さんの問いに、フェ様は首を横に振る。
「いえ。一般的には知られておりませんが、SSランク保持者もおります」
「SSランク……」
「私共はSSランクが最高ランクだと思っておりましたが、認識を改めなくてはなりませんね」
「では、SSSランクは？」
「SSランクのさらに上だと思われます」
なんだか、すごい話になってきた。
SSSランクが今まで知られていなかったランクで、しかも最高ランクなんて。
これは称号の影響なのかな？

「サラ様は基本属性の相性がすでに最高ランクに到達していたので、上位属性との相性も表示されたのでしょう。しかしそれも最高ランクとは……。上位属性の精霊様は人里にはあまりいないので、基本属性よりも相性度が上がりにくいのですよ」
「光と闇の属性は、村の神官様に教えてもらったので知っています。だけど聖光と闇黒は初めて聞きました。光と闇の上位属性ということですか？　それに、空間と時空とは、いったいどんな属性なんですか？」
　私は鑑定結果を改めて見ながらフェ様に質問してみる。だけど……
「わかりません」
「は？」
「この二つの属性を持っていた人は過去に存在していたようですが、かなり昔のことでして、資料が少なく詳細がわからないのです」
「そうなんですか」
「それに属性の最後に以下略と書かれていますが、こちらも初めて見るものでした。あの水晶玉で表示できる限界を超えてしまったのだと考えられます。王都にあるレア級の水晶玉であればサラ様の持っているすべての属性が表示できるはずですが……。残念です」
　やっぱり、鑑定書に以下略なんてつくのは、本来ならあり得ないことだったんだ。
　ちょっと気になっていたので、モヤモヤが少し晴れた気がした。

　まあ、何も問題は解決していないんだけどね！
「では、サラはここに表示されている以外の属性も持っているということですか？」
　お父さんが尋ねると、フェ様はゆっくりと頷いた。
「あくまで予想ですが」
　鑑定書に載っている以外にも属性を持っているとは思わなかったので、神官様の言葉に私達親子は驚くしかない。
「私、そんなにたくさんの属性の魔法を使った覚えがありません！」
　思わずそう口に出していた。
　だって、鑑定書に書いてある属性だって初めて知るものばっかりだったのに、他にも持っているかもなんて信じられなかった。
　私は教わっていない魔法でも使うことができたけれど、それらはお母さん達が知っている魔法ばかり。神官様達でさえ知らないような属性の魔法を使った覚えなんてなかった。
「ふむ。では、特に特殊な魔法を使った覚えはないと？」
「はい！」
　フェ様の言葉に力いっぱい頷く。
「娘の言う通りです。サラはまだ十歳ですし、危険ですので基本属性の上位魔法や攻撃魔法は教えておりません。それに、私は光属性や闇属性の魔法を使えませんので、教えることができませんで

した。本当に基本的なことしか教えていないのです」
お母さんが補足するように、フェ様に説明してくれた。
「では、ごく普通の娘さんだったと？」
「それは……」
フェ様の質問に、お母さんは言葉を濁す。
それはそうだろう。だって普通の子は、教わっていない魔法を使えない。
「……娘は私達が使う魔法を一目見ただけで使いこなすことができました。詠唱を教えたわけでもないのに、です。最近では無詠唱で魔法が使えるようになっておりまして、今では私が教えていない魔法もすべて無詠唱で使えております。娘が言うには、こうなればいいなと思っただけで魔法を使えるそうです」
「鑑定書に無詠唱スキルがありましたが、習っていない魔法にも発揮されるとは」
フェ様達がとても驚いているのが伝わってくる。
やっぱり、普通のことじゃないよね……
「ですが、娘は空間魔法や時空魔法を使ったことはありません。高度な魔法は使わないよう言い聞かせておりましたし、そのように珍しい魔法を使えば私達にわからないはずがありません。そうよね、マーク」
「その通りだ」

お母さんの言葉にお父さんが頷く。神官様達は顔を見合わせたあと、フェ様だけがこちらに身を乗り出して話し出した。
「私共はこれらの鑑定結果は、すべて称号の影響ではないかと考えております」
ついに最大の謎である称号の話になった！
精霊王様の母親なんていうよくわからない称号が、私にいったいどんな影響を及ぼしているんだろう？
「まったく未知の称号ですので確かではありませんが、精霊王様はすべての属性を持っていると伝えられています。それが本当であれば、精霊王の母親の称号を持つサラ様は、全属性との相性度が高かったとしても不思議ではありません」
「私達にはどうしてそんな称号がついたのか、わからないんですが……」
お父さんの言葉に、神官様達ががっかりしているのがわかった。フェ様は椅子に深く座り直して、少しの間何かを考えているようだった。そして、おもむろに口を開く。
「もしかしたら、称号がついた理由を調べることができるかもしれません」
「できるんですかっ⁉」
思わずフェ様のほうに身を乗り出した。フェ様は頷いて話を続ける。
「はい。精霊様のご加護を持つ方に、サラ様を見ていただくのです。加護持ちは精霊様の姿を見て、話すことができます。精霊様ならなぜこのような称号がついたのか、わかるかもしれません」

「加護持ちはこの国に四人しかいらっしゃらなかったはずです。サラ一人のために、そこまでしていただけるんですか？」
お母さんが不安そうに問いかけると、フェ様はキリッとした顔をした。
「サラ様のためなら、私が国にかけ合います」
フェ様の力強いお言葉に、私達家族は感動する。
そこまでしてくれるなんて、フェ様はなんて優しいんだろう。
「そうだ。その際に、レア級の水晶玉もお借りしよう。サラ様の持つすべての属性を調べるのだ。きっと私達が知らない属性があるはずだぞ！」
フェ様の言葉を聞いて、周りの神官様がなにやらざわざわと慌て始めた。
「フェビラル様⁉　さすがにそれはっ」
「なぜだ？　こういう時に使ってこその魔道具だろう。いざとなれば、陛下を脅してでも……」
「しまった！　フェビラル様の悪い癖がっ。一旦、フェビラル様を部屋の外へっ」
「「はいっ」」
フェ様の話がどんどん物騒な方向に進んでいくのを、ミルクティー色の髪にオレンジ色の瞳の神官様が止める。
「さっ。神官長様、少し外の空気でも吸ってきましょう」
「いや。私はまだサラ様達と話をしなければ。……おい、なぜ両腕をつかむのだ。離しなさい、私はまだ話を――」
話の途中にもかかわらず、フェ様は二人がかりで両腕をつかまれ連れ去られてしまった。
「急なお話で皆様もお疲れでしょう。三十分程休憩を入れたいと思います。ではっ」
フェ様を外へ出すよう指示した神官様は、何事もなかったかのように言う。そして、フェ様を追いかけるように急いで部屋を出た。
「「……」」
……国にかけ合ってくれるっていうのは、優しさなんだよね？
「神官長が失礼いたしました」
神官様達の見事な連係プレーに驚いていると、部屋にまだ残っていた神官様に謝罪される。
どうも、私達が気分を害したのではないかと心配しているみたい。
でも、神官様の謝罪よりも私達の興味を引いたのは、別の言葉だった。
「「……神官長？」」
「ええ。フェビラル様はこの教会の神官長でして、他の神官に命令……いえ、失礼。指示を出していたのが副神官長になります」
そんなにすごい人だとは思っていなかったので、まさかの答えに三人で驚く。
「神官長様は国王陛下が幼い頃、教育係をなさっていたこともあったとか。ですから、国からは必ずいい返事をいただけるかと思います」

「そんな方がなぜこんな辺境の町に……」
お父さんが思わずといったふうに疑問を口にする。
「さぁ。私にはわかりかねますが、何分あのような性格の方なので、その……」
最後は言葉を濁していたので、私にはなぜフェ様がここに来たのかよくわからなかった。
でも、お父さん達はわかったみたい。二人して深く頷いている。
あとでどうしてなのか、教えてもらおう。

そのあとすぐに、残っていた神官様も部屋を出ていったので、この部屋には私達親子三人だけとなった。
フェ様の勢いに押されて、あっという間に国に連絡してもらうことになってしまったけれど、本当にそれでよかったのかな？
落ち着くといろいろなことが不安になってくる。
「お父さん、お母さん……」
「どうした、疲れたか？」
「神官様達が戻ってくるまで、お母さんにもたれていいのよ？　少し目をつむるだけでも楽になるわ」
こんな騒ぎになったのに、お父さん達は変わらず私に優しい。

「ごめんね。私に変な称号がついてたせいで、お父さん達に迷惑かけちゃったよね」
申し訳なくって、二人の顔を見ることができなくて、うつむいたまま話す。
「私って、これからどうなるのかなぁ」
こんなことを聞いたって二人が困るだけだとわかっているのに、止まらない。
気にしないと言いつつ、加護があったら嬉しいなと思っていた。その罰が当たったのかな？
まさか、この国に四人しかいない加護持ちの人を呼ぶ事態になるなんて思いもよらなかった。
「そうだなぁ。とりあえず今日はお母さんにごちそうを作ってもらわなくちゃな！」
「……え？」
お父さんからの予想外の返事に思わず顔を上げると、二人は優しいまなざしでこちらを見ていた。
「そうね。今日はサラの好きな食べ物をなんでも作ってあげる」
「サラ、よかったな！　そのためにも早く終わらせて、暗くなる前に村に帰らないと。お父さん一人ならまだしも、大切なお前達を危険な目に遭わせたくないからな」
私のせいでこんなに大事になって、不安で仕方ない。けれど、二人はいつも通りだ。私は思わず小さく首を横に振る。
「そういう話じゃなくって」
「嬉しくないのか？」
「それは嬉しいけどっ。私が聞きたいのは、そんなことじゃないのっ！」

お父さんがわざと話をそらしてるとしか思えない。不満で、大きな声が出てしまう。
なのに、お父さんはなんてことないように言うのだ。
「どんな鑑定結果が出たとしてもお前は俺達のかわいい娘に変わりないからな」
「お父さん……」
お父さんが私の両脇に手を入れて抱き上げ、自分の膝にのせてくれる。お母さんはそんな私達の様子をただ微笑んで見つめていた。
「お前は何がそんなに不安なんだ？」
「だって、神官様が初めて聞く称号だって」
「なんにでも初めてってもんは必ずある。そんなことでお前が俺達に謝ることはない。それに神官様達の顔を見ただろう？　あんなに興奮して、サラ様、サラ様って言ってるんだ。悪い称号ってわけでもないだろうし、あんなにたくさんの属性を使えるなんて、すごいじゃないか」
「お父さ～ん。ぐすっ、ひっく」
お父さんの優しい言葉に涙があふれ、止まらなくなる。
でも、ハンカチを出すためにお父さんから離れるのが嫌で、お父さんの肩に目元を擦りつけて涙を拭いた。
「目を擦ってはダメよ。真っ赤に腫れてしまうわ」
そう言って、お母さんはハンカチで優しく涙を拭きとってくれ、お父さんは私の背中をポンポン

と叩いてくれる。
「おっ、おがあざぁん。ひっく。んっく。あ、ありがとう」
「いきなりいろいろな話を聞いて、驚いたわよね。サラはまだ十歳なのだから、あとのことはお母さん達に任せてちょうだい」
いろいろとわからないことだらけだし、何も解決していないけど、不思議とさっきまでの不安な気持ちはどこかに消えていった。
普段よりも少ない睡眠時間とありえない事態の連続で、私の疲れはピークに達していたようだ。強烈な眠気が私を襲う。
その眠気と戦いながら、もう一つ気になっていたことをお母さんに聞いた。
「マーブルはどこ？」
お母さんに預けたはずのマーブルがいないことが気になっていたのだ。今までは聞ける雰囲気ではなかった。
もしかして、一匹だけで寂しく私達の帰りを待っているんじゃないかと心配だった。
だから答えを聞くまでは眠るまいと必死になって目を開ける。
「マーブルはハッサンさんにお願いして預かってもらっているの。すべてが終わったら迎えに行きましょう」
「ん……」

よかった。アミーちゃんが一緒ならマーブルも寂しくないよね。
「神官様達が戻ってくるまで、少し眠るといい」
お父さんにそう言われるやいなや、私はお父さんの腕の中ですとんと眠りについた。

◆◆◆

「眠ってしまったか」
サラの父――マークが聞くと、母――セレナは静かに頷いた。
「はい。緊張の糸が切れたのでしょう。ぐっすりです」
「俺達だって驚きの連続でいっぱいいっぱいなんだから無理もない」
すやすやと眠るサラの顔を見る二人の表情は穏やかだ。
しかし、サラが寝ているうちに話し合っておかなければいけないことが二人にはあった。
「……加護持ちの方はどなたがいらっしゃるのでしょうか？」
「わからない。四人の中に顔見知りは？」
「私はあまり王宮に顔を出したことはありませんでしたから、おそらくいらっしゃらないかと。ですが、どこかですれ違ったことはあるかもしれません。もし、お父様にご迷惑をおかけすることになったら……」

立ち読みサンプル
はここまで

「大丈夫だ。もしもの時はロドルフ様の負担にならないように、三人でこの国を出よう」
不安そうにマークを見つめるセレナに対して、マークはそう慰めることしかできなかった。

◇◇◇

コン、コン、コン。
ノックの音で目が覚める。
「サラ、起きれるか？」
「もう大丈夫っ」
時間にすれば十五分と短い時間だったようだけど、すっきりとした気分で目を覚ました。
お父さん達に不安な気持ちを吐き出せたからかもしれない。
今は前向きな気持ちで話の続きを聞くことができそうな気がする。
フェ様は部屋に入ってくると、さっきの騒動などなかったかのように落ち着いた様子で席に座る。
その背後には副神官長様が控えていた。
「国との交渉は終わりました」
休憩時間は副神官長様の宣言通り三十分だったにもかかわらず、フェ様は国との交渉を既にすませていた。